

菜穂子・《悲劇》の伝説

——ヒロインと作品の実像を求めて——

大 森 郁之助
澤 美 菜 子

序 章

一、テキストの選定について

堀辰雄の人物と作品を共に愛した釋迢空・折口信夫は、堀のいわゆる王朝物を

堀君は心虚しうして書く人だけに、極めておほまかにではあるが、おほまかにだけに、王朝貴族の生活のてまを適切に捉へることが出来た。源氏の論文を書いた人の中には、私の尊敬してゐる人々が多いが、その方々にも、堀君の「若菜の巻など」は、是非読んで頂きたいと思つてゐる。(角川文庫『かげろふの日記・曠野』解説、昭和二十六年七月)

と絶賛した。王朝物への注目は古代文学研究の碩学としてごく自然なことといえようが、しかもなお、その二年後の堀の死に際しての迢空の弔歌は

「菜穂子」の後 なほ大作のありけりと そらごとをだに 我に聞かせよ

と詠まれた(念の為に。「菜穂子」は昭和十六年三月発表、その九ヶ月後に王朝物の最後の「曠野」が発表されている)。

迢空とはいわば対極的な、ヨーロッパ文学の教養を基盤とした視点からは、例えば加藤周一は

国木田独歩が武蔵野の散歩にみいだした孤独の後に、われわれの小説の主人公が嘗て孤独であつたことはない。まして孤独のただ中で蘇生したことなどはなかつた。それは、自覺的な個人が小説に登場しなかつたといふことと全く同じことである。(中略)ところが、氷室の牧歌的な風景のなかで明は孤独に生きてゐるし、牧場の真ん中にたつてゐる大きな一本の樹から「悲劇的な感じ」を受けとる菜穂子も孤独に生きてゐる。

ことを指摘し(角川文庫『菜穂子』解説、昭和二十六年五月)、その理由によって「敢えて菜穂子を一時代の日本文学の代表的作品の一つとする」と立言した。

この、堀の代表作として一に並んでも二とは下らないであろう「菜穂子」は、福永武彦氏の分類^{注1)}によつて四つの形で読む事が可能な作品とされている。第一の形は、「小・菜穂子」もしくは「レシ・菜穂子」と呼ばれるもので、昭和十六年三月号「中央公論」に発表された形である。この初出時のみ章の分け方が違つたので、特に「初出・菜穂子」と称して区別している。第二は、「小・菜穂子」に『楡の家』(第一部、第二部、

『菜穂子の追記』より成る）を加えた「二部作・菜穂子」で、昭和十六年十一月東京創元社発行の単行本『菜穂子』で実現した形である。「楡の家」第一部は旧作「物語の女」（昭和九年十月号「文芸春秋」）の改作、第二部は「目覚め」（昭和十六年九月号「文学界」）に加筆訂正を施したもの（大幅な改稿は認められない）、『菜穂子の追記』は書き下ろしである。第三は、「二部作・菜穂子」に「ふるさとびと」（昭和十八年一月号「新潮」）を加えた「菜穂子 cycle」と称されるもので、昭和二十二年九月角川書店版『堀辰雄作品集第五・菜穂子』が採用した形。第四は、「大・菜穂子」と言われるものだが、これは作者の没後発見された、『菜穂子』と題された創作ノオトに見られる構想を指す。ノオトの作成時期は昭和十五年七月から十月の間と推定されている。

以上の四つの形の中からテキストを選定する必要があるが、現存本文の研究に際して、単なる構想である「大・菜穂子」を過大視する事は避けるべきであろう。更に、「小・菜穂子」と「二部作・菜穂子」に於ける『菜穂子』との間に多くの異同が認められる事、それに対して「菜穂子 cycle」内の「二部作・菜穂子」にあたる部分は殆ど「二部作・菜穂子」のままであり、この形で新たに加えられた「ふるさとびと」には総題に掲げられた「菜穂子」が登場しない事等を考えあわせると、女主人公「菜穂子」に関する問題を考察するにあたっては「二部作・菜穂子」をテキストとするのが妥当と思われる。従って、以後は「二部作・菜穂子」を「菜穂子」、「小・菜穂子」にあたる部分を「菜穂子」と表記して論を進めてゆくことにする。

二、従来の作品評価と、本稿の目的

『菜穂子』は堀辰雄にとって極めて重要な作品であった。「私が『菜穂子』といふ題の下に、数年前に一つの小説を構想し出したのは、一九三四年の夏の末に『物語の女』といふ或夫人の肖像を書き上げた直後だった^(注1)」との記述から類推される構想期間の長さや、「かうして漸く出来上

った『菜穂子』は、作品としての出来不出来はともかくも、作者の私にとつては、生れてはじめて本当に小説らしい小説を書いたやうな気のあるものである^(注2)」という脱稿後の自負からも、堀の『菜穂子』に対する執着の一端がうかがえよう。

「物語の女」「菜穂子」に言及した論文は、しばしば堀のエッセイ「小説のことなど」を引用する。ここで彼は「私はいままで好い気になつて自分自身の物語、或ひはそれに似たものをばかり書いてきた私自身がすこし腹立しくらゐである」「今までのままでは、もうにっちもさつちも行けなくなつてゐる」と「告白^(注3)」している。確かに、「小説のことなど」以前の作品である「聖家族」「恢復期」「美しい村」等は、東京以外に軽井沢という特殊な環境を舞台としたり、結核患者が登場したり、又、芥川龍之介、片山広子・総子らとの交流体験の影響が指摘されたりしているように、彼のいう「自分自身の物語」の感が強い。その自覚と反省を経て「私が自分自身ではない或物の裡に自分を置いて書かうと試みた最初の作品^(注4)」である「物語の女」は成立し、更に七年後に『菜穂子』が書かれた。

『菜穂子』に対する堀の思い入れの深さは既に述べたが、この作品の堀文学に於ける特異性は所謂「俗の形象」にあるとされており、彼自身の次のような記述・発言も残っている。

この頃、やつと腰を据ゑて小説を書いてゐる 僕好みの人物たちを日常生活の中に引き下ろして書いてゐるのだがどんなものになるかなあ^(注5)

今度の小説には、苦手が登場する。厭な人間が書けなければ、本当の小説にはなれないからね^(注6)

こうして『菜穂子』は「堀の全作品の中で最も現世的な意識を強くたたへ」た「特殊の作品^(注7)」となるが、多くの論者は堀の努力は認めながらもこの作品を決して高く評価していない。

畢生の作ともいふべき「菜穂子」(昭16・3)はロマンならぬレシとしての、いささかやせ細った作品に終った(後略)^{注9)}

堀辰雄にとって最も重要な、最も執着のこもった作品、それにしては苦心や執着がみのついているとはいいがたい「菜穂子」(略)^{注10)}

「俗の形象」という点については、次のような指摘がある。

黒川圭介は単純さはまる男で、かういふ単純さを作者は愛さない。

(中略) 愛さないものをこの作者の文体は描きやうがなく、圭介とその母とは、平板な、気のない描かれ方をされるだけにをはつてしまふ^{注11)}

自ら平凡な結婚を選んできました菜穂子をめぐる主題と、菜穂子との幼い日の淡い思い出の断たれた胸を病む明が(中略)孤独に生きる主題と、このふたつの主題が、フーガ形式のように美しく奏でられひびき合い互いに深められているのを気づくのみである。この清澄なハーモニーの前には、黒川圭介とその母の存在は合奏協奏曲の伴奏にすらもなり得なかつた。^{注12)}

しかし、作品に加えられたこのような批判に対しては、次の二つの面から疑義をはさむ事が可能であろう。

一つは、堀辰雄という作家に対する読み手側の先入観である。事柄は別だが小川和佑氏は、昭和十六年、太平洋戦争開戦前夜ともいふべき厳しい思想統制下に於て、このような「反時局的」な小説が削除も伏字もなしに発表できたのは、治安当局の、堀辰雄は思想活動をしない作家であるという先入観が幸いした為であると指摘している。この、思想活動云々という点に限らず、「菜穂子」以前の作品群が読者の心につくりあげてきた、堀文学に対する固定観念には、かなり強固なものがあつたと推察される。所謂、愛さないものを描きようがない、という先入観によつて、読者があらかじめ堀の限界を定め、それを越えた部分を批判しようとする体勢を固めてしまっているとは言えないだろうか。

二つ目は、序章の一で述べた「大・菜穂子」の影響である。中村真一郎氏はその内容について「このあり得べき『菜穂子』は、俗なところも退屈なところもあつて、純粹さで欠けたところを豊かさで補っている。より小説である」と述べている。前掲浅井氏の論は、この「大・菜穂子」の存在を前提としてすすめられているのだが、確かに「大・菜穂子」を念頭に置いて見ると、現存本文に於ける俗(具体的には黒川圭介とその母)の描写は舌足らずなように感じられる。しかし、「大・菜穂子」で意図されながら「菜穂子」で日の目を見なかつた要素(あまりに多いのでここにはその列挙は控えるが)は、俗の形象に関するものばかりではないのである。それだけの隔たりを越えて「大・菜穂子」を直線的に「菜穂子」のあるべかりし形と考えるのは、読者の誤解に近いのではないだろうか。

「菜穂子」を、「真の夫婦愛の誕生」が意図されながらも実現に到らなかった作品であると考え、最終場面(二十三・二十四章)に菜穂子の悲劇的な姿を見取る論文が散見されるが、それらの多くは以上の二点と、本文から受ける印象に束縛されているのではないかと思われる。そして、その事によつて最も不当な位置づけをされてきたのは、圭介と同じ「俗」側の人間で、しかも圭介のような、菜穂子に対する心のゆらぎも描かれていない、圭介の母その人であろうか。圭介を「母の傀儡」とまで極言さえする論者は、彼らが圭介に認めるのと同等、又はそれ以上の、菜穂子に対する加害性を、圭介の母にも読みとっている。しかし現存本文に於ける圭介の母は、本当にそのような存在として描かれているのだろうか。

以上の疑問から、本稿は、まず圭介の母の形象を分析する。更にそれを通じて、菜穂子圭介夫婦の関係が最終場面でのどのような様相を示すに到ったかを明らかにし、「夫婦愛」に関する主題を解明しようとするものである。

一章 圭介の母の、作中での役割

『菜穂子』全二十四章は、三人称全知視点^{注四}を用いた形式で描かれている。『菜穂子』に於て圭介の母の存在が大きな意味を持つことは今更言うまでもあるまいが、彼女の内面はごく僅かしか描かれない。心の内がそのままの形で示されるのは、具体的には次の三ヶ所である。

圭介の母は女だけに、さう云ふ菜穂子の落ち着かない様子に何時までも気づかないでゐるやうな事はなかつた。彼女の娘がいまのままの生活に何か不満さうにし出してゐる事が、（彼女にはなぜか分からなかつたが）しまひには自分たちの一家の空気をも重苦しいものにさせかねない事を何よりも怖れ出してゐた。（三）

昔気質の母は、この頃何かと氣ぶつせいな娘を自分達から一時別居させて以前のやうに息子と二人きりになれる氣楽さを圭介の前では顔色にまで現はしながら、しかし世間の手前病氣になつた娘を一人で転地させる事にはなかなか同意しないでゐた。（六）

母は自分の息子の娘が胸などを患つてサナトリウムにはひつてゐる事を表向き憚つて、ちよつと神経衰弱位で転地してゐるやうに人前をとりつくろつてゐた。（十）

これらの描写からうかがえるのは、世間体を氣にかけ結核をおそれる、氣の小さい老女の姿であり、『大・菜穂子』にあるやうな「専制的な母」^{注四}「菜穂子、胸をわづらひ、母無理にサナトリウムに入院さす」といった、積極的に菜穂子を黒川家から排除しようとする動きは見られない。同様の指摘は、既に山本裕一氏によってなされている。

黒川家での菜穂子は確かに疎外されている。しかし母の心配しているのは「偽っている」という意識を持ち出してから菜穂子が「生活に何か不満さうにし出している事が（中略）しまいに自分たち一家の空気をも重苦しいものにさせかねない事」である。圭介も、菜穂子がそのような意識を持ち出すまでは母と菜穂子を相手に暮らし

向きの話をしてゐる。つまり彼女を疎外し、追い詰めてゐるのは夫でも夫の母でもなく、彼女自身の「偽っている」意識なのである^{注四}にもかかわらず、

三村家では世間への手前、菜穂子の疾病のことを秘し、母は圭介の見舞のみならず手紙を書くことさえ許可しないのである^{注四}（傍点引用者）

といった極端な錯覚をも生む程に「専制的な母」という印象が払拭できないのは、彼女がしばしば菜穂子や圭介というフィルターを通して描かれるのではないか。

菜穂子は、療養所にゐる間絶えず何かを怖れるやうに背中を丸くしてゐた母とその母のゐるところでは自分にろくろく口も利けないほど氣の小さな夫とを送り出しながら、何かその母がわざわざ夫と一しよに自分に附添つて来てくれた事を素直には受取れないやうに感じてゐた。それほどまで自分の事を氣づかつて呉れると云ふよりか、圭介をこんな病人の自分と二人きりにさせて置いて彼の心を自分から離れたいものにさせてしまふ事を何よりも怖れてゐるがためのやうだつた。（六）

圭介は余つて程母に云つて菜穂子を東京へ連れ戻さうかと何遍決心しかけたか分からなかつた。が、菜穂子がゐなくなつてから何かほつとして機嫌好ささうにしてゐる母が、菜穂子の病状を楯にして、例の剛情さで何かと反対をとるならう事を思ふと、もううんざりして何んにも云ひ出す氣がなくなるのだつた。（十四）

ここに見られる圭介の母の形象は、菜穂子、圭介の心境を反映したものである。（六）で、姑が付き添つて来たのは圭介の心を自分に引き寄せさせない為だと感じていた菜穂子が、（九）では見舞いに来た姑に向かって「自分自身も姑にはすっかり快くなつたやうに見え、こんな山の療養所にいつまでも一人で居るのを何かと云はれはすまいかと氣づかひ

でもするやうに、自分の左の肺からまだラッセルがとれないのである事な
んぞを、いかにも不安さうに説明」するという、前と逆とはいわないま
でもちぐはぐに、「帰って来い」と言われる事を懸念した言動を見せて
いる事からも、姑の形象にその時々他者の（ここでは菜穂子の）思惑
が関っている事は明らかであろう。更に、「初出・菜穂子」から「二部
作・菜穂子」への過程で、

「あそこにあたのが患者さんたちなのかえ？」姑は菜穂子と廊下を
歩き出しながら、非難めいた口吻で云った。（「初出・菜穂子」第一
章）

訝しさうな口吻で云った。（「二部作・菜穂子」九章）

という改稿がなされている点からも、堀が、姑に積極的な攻撃性を付与
しようとしていたとは思えないのである。つまり、現存本文では、姑が
積極的に夫婦の間を阻んでいるというよりも、互いに触れあおうとしな
い妻と夫の姿が、母の存在を過剰に意識するという形であらわされてい
るといえる。端的に言えば夫婦が二人共、母の存在を、相手と自分と
を隔てる障壁として措定する事によって、夫婦の間がうまくいかない責
任を母に転嫁しているように思えるのである。

勿論、十年も息子と二人きりで過ごしてきた姑としての立場を考えれ
ば、彼女自身の内に夫婦の間を遠ざけようとする意志がまるで無かった
とは言えない。（十）で描かれる、菜穂子の病気の事をわざと実際より
悪いもののように言い触らす、という行為も、菜穂子への心底からの思
いやりがあれば為されたいものではあろう。しかし、直前の（九）で、
菜穂子自身が「いかにも不安さうに」恐らくは誇張をまじえて姑に自分
の病状を説明しているのだから、ここで姑の感情だけを取り沙汰する事
は出来ないのではないだろうか。更に、この姑の言動は、直接菜穂子を
傷つける方向に波紋を広げてはいない。あくまでも、菜穂子とは全く関
係のない、遠縁の者との噂話の中に収まっているのである。ここでの彼

女の行為はそれ自体として意味を持つというよりも、夫圭介が菜穂子を
突然見舞う契機になるという点で、本文の重要なポイントを占めている
のだ。

これらを総合すると、専制的な母のイメージは、主に菜穂子や圭介の
心境との絡みで生まれたものであり、圭介の母は作品に於て、一個の人
格を持つ登場人物としてよりも、むしろ菜穂子と圭介の意識の中で存在
の意味を持つのだと考えられる。

二章 最終場面の分析

母の存在を以上述べてきたようなものと考えたと、最終場面はどのよ
うに捉えるべきだろうか。菜穂子のサナトリウム脱出、「思ひ切つて自
分自身を何物かにすつかり投げ出す」（二十三）行為は、「おれはこんど
の事は母さんに黙つてゐるよ。」（二十四）という、菜穂子と圭介が母に
対して秘密を共有する状況をつくり出す。ここで、夫婦の意識内での母
の存在の意味が微妙に変化したと言えるのではないだろうか。つまり、
主に夫婦間の障壁であった筈のものが、夫婦と対峙するという側面をも
そなえはじめたのである。無論ここでも、姑の障壁としての役割は持続
しているが、前章で述べたように、それが正確な意味で彼女の意向によ
るものではない事がはっきり表現されている。この場面を、菜穂子と圭
介の両側から考察してみたい。

菜穂子の上京の動機は、結局明白な形では本文にあらわれてこない。
しかし、サナトリウムを出た時点での目的は、雪を浴びながら歩くこと
と、姑宛の手紙を投函することであった。菜穂子の「決心」は停車場で
なされるものであり、サナトリウムを出た目的はそれに比べれば小さな
ものだが、（十一）で圭介が姑の噂話を契機に突然菜穂子を訪れた事を
考えあわせると、ここでも姑が関与している事は興味深い。夫婦が相手
を拒もうとする時には障壁として意識され、相手に近付こうとする時に

は逆の役割も果たし得るという母の存在を考えるにあたつて、注目される箇所ではないだろうか。

一方、菜穂子を前にして、圭介は次のような反応を示す。

圭介にとつては、さういふ妻の癖のある眼つきこそあれほど孤独の日々に空しく求めてゐたものだつたのだ。が、今、それをかうしてまともに受け取ると、彼は、持前の弱気から思はずそれから眼を外れせずにはゐられなかつた。

「母さんは病氣なんだ。」圭介は彼女から眼を外らせた儘、はき出すやうに云つた。「面倒な事は御免だよ。」(二十三)(傍点引用者)

菜穂子をホテルに連れて行き、彼女をもう少しで理解できそうになる時も又、彼は母親を思ひうかべてしまふ。

そのめつさり老けたやうな母の顔も、それから又、その病氣さへも、何か今こんな所でこんな事をしてゐる自分達のせゐのやうな氣もされて、この氣の小さな男は妙に今の自分が後めたいやうに感ぜられた。(二十四)(傍点引用者)

これらの場面に於て、圭介の心の中では明らかに、母は、圭介が菜穂子に近づく事を阻む存在である。だが実際の彼女は単に風邪をひいて寝込んでゐるだけで、菜穂子の上京や圭介の拒絶に関する意図などは全く持っていないのだ。事態はむしろ逆であつて、

彼はその母が実はこの頃ひそかに菜穂子に手をさしのべてゐるやうなぞとは夢にも知らなかつたのだ。そして彼自身はと云へば、(中略)再びまた以前の母子差し向ひの面倒のない生活に一種の不精から来る安らかさを感じてゐる矢先きでもあつたのだ。(二十四)(傍点引用者)

ここに引用した三か所の本文で傍点を施した部分をふり返つてみると、「持ち前の弱気」「氣の小さな男」「一種の不精」と、圭介の人格がここであつてつづけに説明されている事が分かる。彼が、母の存在を盾に取つ

て菜穂子に向かつて積極的な態度をとろうとしなかつた事も、今またあと一步のところで妻の理解を諦めるのも、實際はこれらの性情に因るのである。

先の引用部分でもう一つ注意したいのは、「母が実はこの頃ひそかに菜穂子に手をさしのべて」いる、という箇所である。「この頃」と限定するからには、以前はそうではなかつたわけだが、その変化の原因は明確ではない。前章の結論からは当然の事だが、「手をさしのべる」という行為の主体である姑の、変化の必然性は明示されないのである。この部分とかすかな照応が感じられるのは、菜穂子が「姑の手紙の中に何かいままでの空しさとは違つたものを徐々に感じ出して」(十九)いる部分だが、直前の(十八)で描きこまれてゐる菜穂子の心理を考えると、ここでは、姑の手紙の性格が変化した事よりも、菜穂子の心境が変化した事の方を重視すべきだろう。姑だけを見てみると、唐突の感を逃れないう「手をさしのべる」という態度の変化も、菜穂子の心境の変化に対応するものと考ええる事によつて説明がつく。加えて、この描写によつて、姑が夫婦の関係を積極的に阻む存在ではない(恐らく、もともと、なかつた)事が、読者に対して初めて明示された恰好になつていと言えよう。本章の冒頭で述べたように、菜穂子の自己投企によつて、夫婦は母に知れない体験を共有する。この点については大森郁之助の

少なくとも菜穂子と圭介との心的関係は新しい様相を示した。圭介も菜穂子も、今日程に(イ)同じ事態によつて起つた(ロ)相似した性質の思ひを(ハ)同じ時点で、相手に對して抱いた事はなかつた筈である。

(中略)相手の思ひを、このように歪めず逸らさずに、只全き受け入れのみを希ひ合つた事は、かつて無かつた筈である。^{注四}

とする指摘がある。前述したように、この場面では、圭介の人格特性がひとつずつ取り出して説明するかのような形で(彼の懊悩を通して描出するという形ではなく)示され、一方、菜穂子は、例えば子供の投げた

雪球が自動車の窓ガラスに当たった時の圭介の反応について

「此の人はこんなに子供が好きなのかしら?」(中略)ちよつと好意のやうなものを感^レじながら、初めて自分の夫のそんな性質の一面に心を留めなどした。……(二十三)

とか、ホテルに着いて

自分が若し相手の立場にあつたら何よりも先づ自分の心を占めたにちがひない疑問(菜穂子が突然療養所を脱け出して来た理由)を、圭介はともかくもその事(菜穂子を今夜どこへ泊めるか)の解決を先につけておいてから今漸つとそれの本気になつて考へはじめてゐるらしい事を感じた。彼女はそれをいかにも圭介らしいと感じながら、それでもとうとう自分の心に近づいて来^レかかつてゐる夫をもつと自分へ引きつけようとした。(二十四。傍点及び()内は引用者)といった受けとめ方をしている。これらの彼女が圭介を見つめる態度はまさに「歪めず逸らさず」の「かつて無かつた」ものである。

かつて、菜穂子にとつての圭介は、結婚式当日挨拶に来た男達を見ながら「この男達とだつて自分は結婚できたのだ」(九)と思う程に、結婚相手としての必然性を欠いていた。いわば、誰でも良いポジションに偶然納まったというだけの人間(関係)だったのだが、今ここで初めて菜穂子は圭介を一人格として認め始めると言えよう。

本作品の構想段階で「真の夫婦愛の誕生」が意図されていた事は前に述べたが、それではこの、夫婦関係にとつて明らかにプラスの価値を持つと思われる菜穂子の側の変化は、「夫婦愛」への発展を予測させるものと考えられるだろうか。この点について、『楡の家』に立ち戻つて検討してみることにする。

三章 「真の夫婦愛」の意味とその可能性

「物語の女」は、『楡の家』と改題され、独立した作品から『菜穂子』

の「背景として読まれることを(中略)希望する」^{注23}ものとなるにあたつて、大幅に改められている。具体的には、地名、人名の略号の一部が具体名におきかえられた事、題名の変化に伴い〇村でのいくつかの場面が楡の木を中心に描かれるようになった事等だが、最も本質的な変化の一つは、菜穂子の三村夫人に対する反発の仕方に認められる。二作間の改訂の問題については前掲大森の著作に詳しく、右の点は、

「物語の女」では、或いは秘められた同質性の裏返しとしての反撥であり、或いは同じ方向、目標に向かつて競う敵手としての反撥であつた。しかし、『楡の家』では、どんな意味でも背反した者としての反撥となつて^{注24}いる。

と述べられている。詳細は略すが、

お前はいつかその私と同じやうな苦しみを苦しむために、しばしば這入つて来るやうなことがあるかも知れぬ。(「物語の女」)

お前はいつかお前の故に私の苦しんでゐた姿をなつかしむために、しばらくの日を過しに来るやうなことがあるかも知れぬ。(『楡の家』

第一部)

私はお前が私を嫉妬してゐるらしいことを苦しいほどはつきりと感じた。(「物語の女」)

私はお前が私のことでどんなに苦い気もちにさせられてゐるかを切ないほどはつきり感じた。(『楡の家』第一部)

等の改稿部分にこの変化を見るのは、恐らく当を得たものと考えられる。このように、『菜穂子』の背景となるにあたって、表面上は完全に相対立する存在として設定しなおされた母娘が、それでも意見の一致をみるのは、『楡の家』の手記執筆時点で既に故人となつてゐる、菜穂子の父に言及した次の箇所^{注25}に於てである。

「本当に私にはもつたない位に好いお父様でした。(中略)ことに私がいまでもお父様に感謝してゐるのは、結婚したてはまだほん

の小娘に過ぎなかつた私を、はじめからどんな場合にでも、一個の女性としてばかりでなく、一個の人間として相手にして下すつたことでした。私はそのおかげでだんだん人間としての自信がついてきました。……」

「好いお父様だつたのね。……」お前までがいつになく昔を懐しがるやうな調子になつて云つた。「私は子供の時分よくお父様のところへお嫁に行きたいなあとと思つてゐたものだわ。……」（「楡の家」第二部）

三村夫人と森於菟彦をはじめ、菜穂子と明、明と早苗等、「菜穂子」に描かれる男女の關係は、すれちがいの主とした現実的には何の实りももたらさないものばかりだが、三村夫妻の關係は、現實に即した「夫婦愛」と称するに相応しいものであつたと言えよう。同時に、これが三村夫人にも菜穂子にも、全面的に肯定されている事に注目したい。

菜穂子は、母三村夫人の性情を受けつぎつとも、それに不安を感じて現実的な生き方を目指す女性である。逆に言えば、彼女の性質の中にも母親と同種の性向は含まれるという事だが、「楡の家」で母と対峙する彼女には、母の性情に対する斟酌は一切認められない。前述したように、ここで描かれるのは母娘の対立であり、彼女が母に示して見せるのは頑なな現実志向のみである。にもかかわらず、ここで彼女が柔軟な態度を見せている事の意味は大きい。つまり、自らの内に確實にある母と同種の性向と、それへの危機感から生じた現実志向によって二つに引き裂かれ、「半分枯れた儘で」（九）生きてゐるやうな菜穂子、そうした彼女がその両方の志向を満たし、自己を統合して半枯れの状態から再生をはかるにはどうするべきか考えるにあたつて、この箇所を見逃す訳にはいかないであり、それがすなわち作品中で唯一「夫婦愛」と呼べる男女の關係なのである。

更に、この「夫婦愛」の性質について考えてみたい。三村夫人及び菜

穂子がこれを評価する重点は、当然「私を、はじめからどんな場合にでも、一個の女性としてばかりでなく、一個の人間として相手にして下すつた」という部分にあると思われる。しかし、これは例えば「優しい人でした」というのと同種の、性質上の美点とされるべきではないだろう。「優しい人でした」は、相手への働きかけ方の問題であるが、「一個の人間として相手にする」のは受け入れ姿勢の問題だからである。ここには、相手に奉仕しようという心も、相手からの奉仕を期待する心も表現されておらず、愛と言うには淡泊すぎる印象を受けるが、これは明らかに、夫の死後十年を経て尚三村夫人が感謝とともに想起する「夫婦愛」の核心なのである。

「菜穂子」最終場面に於て、初めて、菜穂子が圭介を一人格として認める心理が描かれている事は前章で指摘した。圭介は、結局妻を掴みこねるが、彼にも又菜穂子を理解したいという強い要求と、彼なりの努力が認められる。ここに、「真の夫婦愛」が実現する可能性を読みとる事が出来るのではないだろうか。圭介がこの時、

いまにもその瞬間の彼女の心の内が分かつて、「もう二三此のホテルにこの儘居ないか。さうして誰にも分らないやうに二人でこつそり暮らさう。……」

等と口走らないのは当然である。それを口にすれば圭介は現実世界に生きる人間としての性格を大幅に減ずる事になり、そのような相手と互いに理解し合つても、菜穂子が母から受けついで性情と現実志向を双方満たす形で自己統合を果たしたとは決して言えないからである。従つて、最終場面の形象は、「真の夫婦愛」の萌芽を表現するものとして、これだけで既に十分といえるのではないだろうか。

結 び

以上、圭介の母の役割を明らかにしながら菜穂子、圭介夫婦の最終場

面の形象をどう解釈すべきか考えてきたが、現存本文から「真の夫婦愛の誕生」に至る夫婦関係の進展を読みとる事は決して不都合ではないと言えるだろう。そしてそれが同時に、菜穂子の自己統合を意味していた事をここでもう一度確認したい。

「菜穂子」に於ける俗の描写が高い評価を受けてこなかった事は冒頭で述べた。しかし、この作品の堀文学の中での特異性が俗の形象にあり、堀辰雄自身それを強く意識していたとしても、作品の主眼はあくまで総題である「菜穂子」の心理を描くことであつた。

私は次いでその続篇として、さういふ婦人を母とした、新しい世代の娘を描いてみたかつた。母と異つて、もつと現実的な生きかたをしようとしつつ、自己のうちに潜む母とおなじやうなロマネスクな^{注四}気もちに苦しめられ出すやうな、一人の若い女を描かうと思つたのである。

菜穂子の苦しみは、彼女が自らの内にある母と同種の性情を無理矢理押さえ込んだ為に生じたものである。従つて、俗世間と、その中で苦しむ菜穂子の姿を巧緻に描きあげた結果、彼女の懊悩の原因が俗世間にあるかのような誤解をまねく事は、避けられて当然だつたと言えよう。その事によつて、菜穂子の悩みはより一層、母から受けついだ素質と現実志向をどう満たしてゆくかという内面性を強く帯びる事になる。それら双方に肯定されるものが、相手を受け入れる事を中心とする夫婦愛であり、最終場面に於ける圭介、菜穂子の様相に、その萌芽が認められる事は既に述べた。つまり、「菜穂子」を締め括る「真の夫婦愛の誕生」は、同時に菜穂子が自己を統合しおこせた事を示すものであつたのだ。その事を象徴的に表すのは、「さうやつて冷い硝子に自分の顔を押しつけるやうにしてゐるのが、彼女にはだんだん気持ちよく感ぜられて来てゐた。」(二十四)という菜穂子の形象である。この姿勢が、「私(母三村夫人)がよくさうしてゐる」「さういふお前(菜穂子)の物思はしげな姿はな

んだかそんなときの私にそっくり」(「楡の家」第一部)のものである事を考えると、ここで「新しい人生の道」(二十四)を感じながら「気持ちよく」硝子に顔を押しつけている菜穂子は、もはや母から受けついだ性情に反発しようとする頑なな心を持たず、それ故「自分を伴つてゐる」(三三)という意識からも解き放たれて、「楡の家」時代からの長い苦悩に終止符を打つたと言えよう。

最後にこの、相手を受け入れる態度に重点をおいた男女の関係を「夫婦愛」と解釈する事の妥当性について、生活者堀辰雄の書簡を通じて確認したい。

僕はもう三十五(なんだか自分でも嘘みたいだけど)にもなつてゐるのだし、これまで二つも三つも大きな人生を経験したあとですから、自分に好きな人が出来てもその人にもう夢中になつて逆上せあがるやうな事もない代り、その人の性格や才能の好いところも悪いところも恐らくその人自身と同じ位に知つた上で、その人を本当に静かな気もちで好きになつてゐられるのです。僕が君を愛してゐる^{注五}気持もそれに近いものです。

「菜穂子」脱稿の三年前、後の堀夫人に送られたこの書簡から、堀辰雄が自らの内にある愛の形を、まさに相手をそのまま受け入れる事として意識していた事が分かる。「菜穂子」に於ては、圭介の属性が最終場面で列挙され、菜穂子とその一つ二つを好意をもつて心に留めるといふ描写がなされていることは既に見た通りであり、堀辰雄が黒川夫婦の未来に、現実的な「真の夫婦愛」の達成を想定していたと解する事が可能であろう。

注(1) 『「菜穂子」創作ノオト考』(『「菜穂子」ノオト及び覚書』(麦書房、昭和五十三年八月刊)収)

(2) 草稿『「菜穂子」覚書』(一九四一年八月十五日記、とある。)

- (3) 同前
- (4) 「小説のことなど」(「新潮」昭和九年七月)
- (5) 新潮社版『聖家族』(昭和十四年八月刊)序
- (6) 昭和十五年十月三十一日付、神西清宛(葉書)
- (7) 中村真一郎「堀辰雄——一つの感謝」(『文学の魅力』(東大出版会、昭和二十八年五月刊)収)
- (8) 伊藤整「堀辰雄」(『現代日本小説大系』第五十三卷(河出書房、昭和二十六年四月刊)収)
- (9) 佐藤泰正「堀辰雄における近代と反近代」(『国文学』昭和五十二年七月)
- (10) 原子朗「文体の問題」(同前)
- (11) 三島由紀夫「現代小説は古典たりうるか」(「新潮」昭和三十二年六月八日)
- (12) 浅井清「作品論 菜穂子」(「解釈と鑑賞」昭和三十六年三月)
- (13) 「堀辰雄——作家の境涯」(丘書房、昭和六十一年四月刊)
- (14) 前注(7)に同じ。
- (15) 創作ノオト「菜穂子」(注(1)収載書初収)
- (16) 例えば、
病院を脱け出した菜穂子が、自己の内に、残った夫に対する最後の愛情を、冷やかな夫の打算と妥協とに打ち断たれて、再び孤独の高原に帰る(略)(岩上順「新文学の想念」、昭森社、昭和十八年二月刊)
世俗のなかで生の磨滅を体験し、夫のなかに生を見いだすための最後の賭にもやぶれた菜穂子には果していかなる可能性が残されているか。
(佐々木基一・谷田昌平「堀辰雄」、五月書房、昭和三十三年七月刊)
等の指摘がある。
- (17) 吉村貞司「堀辰雄——魂の遍歴として——」(東京ライフ社、昭和三十年七月刊)
- (18) 話し手自身は作中場面に登場せず、すべての作中人物の心の中に自由に出入りする。何もかも知っている全知全能の話し手である。「竹取物語」など(主観的・外在話し手)(「解釈と鑑賞」昭和五十一年三月臨時増刊「文

芸用語の基礎知識」〈視点〉(この項、井関義久)

- (19) 前注(15)に同じ。
- (20) 山本裕「『生の不安』についての一考察——『菜穂子』研究ノート——」(『京都教育大学国文学会誌』第二十一号、昭和六十一年十一月)
- (21) 小久保実「新版 堀辰雄論」(麦書房、昭和五十一年十月刊)
- (22) 「堀辰雄・菜穂子の涯」(風信社、昭和五十四年十二月刊)
- (23) 創元社版「菜穂子」(昭和十六年十一月刊)追記
- (24) 前注(23)に同じ。
- (25) 「日本語のロマネスクは、一つは(ロマネスク様式)(建築などの様式)をさす言葉として使われ、同時にやや古色があつた趣味の小説や風変わりな作品をさしてもロマネスクと称し、両者がまったく区別されずに用いられている」(『芸用語の基礎知識』(ロマネスク)(及川茂)というのが一般的な解説だが、「ロマネスク」という言葉は堀辰雄の常套句とも言えるもので、心理の屈折を意味する言葉である」(池内輝雄「鑑賞日本現代文学」堀辰雄「(角川書店、昭和五十六年十一月刊)」ともいわれ、堀自身の文章で「女性的」という単語を「ロマネスク」と改めている例が見られる
- (26) 「『菜穂子』覚書」等、明確な概念規定は困難である。
- (27) 角川書店版「堀辰雄作品集第五・菜穂子」(昭和二十二年九月刊)あとがき
昭和十三年二月四日付、加藤多恵子宛(書簡)

付記 本稿は執筆署名二人目の澤が一旦書き上げたのち、本学専任教員である大森が延べ約五十個所一千四百字を加筆したものである。本紀要の投稿内規で専任者以外の執筆は原則として専任者との共著に限って認められており、本稿はその規定に叶うものであるが、同時に、もし常識的な意味でこれは誰の仕事かと問うならば大森・澤の断じてなく、紛いもない澤の仕事であることを、合法的かつ合理的に明記しておく。なお一言付け足すと、じぶんより若い研究者に何かの手を貸すことに極めて熱心だった高橋教授への奠物としての適わしさも、ひそかに感じつ、。

(平7・11・14 大森)